

第二章 富丘会の八〇年

横浜高等商業学校の第一回卒業生一一七人は、一九二七年三月、清水ヶ丘を巢立っていった。折りしも、歴史に残る金融恐慌の嵐が襲い、銀行の取り付け騒ぎが全国に広がり始めていた。

卒業とともに横浜高等商業学校同窓会が生まれ、やがて名を富丘会と改める。戦火は広がり、母校も白亜の本館を残すのみとなって戦争は終わる。

富丘会は戦後いち早く活動を再開し、富丘会報の復刊、地方支部の拡充など会員相互の交流を深めるとともに、母校の大学昇格（一九四九年）、保土ヶ谷区常盤台への全学統合（一九七四年）に対応して、同窓会として協力を進めてきた。一九七四年には念願の富丘会館も誕生した。

さらに、富丘経済研究会の設立、横浜国立大学経済・経営両学部五〇年史の発刊と活動の幅を広げ、毎年総会には七〇〇人前後の卒業生が集まるようになった。一九九〇年には財団法人に衣替えし、二〇〇〇年には、教養人間科学部、工学部の同窓会と連携して横浜国立大学同窓会連合も生まれるに至った。

富丘会は母校への寄付だけでなく、在学生への支援活動を多彩に展開し、激動の時代にふさわしい同窓会を目指している。



鈴木 勲・第7代会長



内山潤一郎・第7代会長代行



田村辰雄・第8代会長

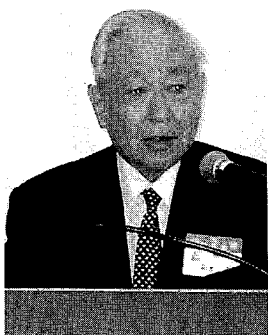


本行基資・第5代会長



川島喜八郎・第6代会長

二 富丘会の八〇年



永井 隆・第11代理事長



齋藤興二・第9代理事長



入江昭夫・第12代理事長



若杉 明・第10代理事長

一 草創と戦後復興

第一回総会開かる

横浜高商の第一回卒業生がつくった横浜高等商業学校同窓会の会長には、会則によって母校の田尻常雄校長が就任し、事務局を母校に置いた。一九二七年十一月には第一回総会が開かれ、神奈川、東京に支部ができた。翌一九二八年には同窓会報が発刊され、大阪支部に続いて数年の間に神戸、静岡、名古屋、そして朝鮮と相次いで地方支部が誕生した。

一九三四年には母校の創立一〇周年を記念して物故会員慰霊祭、同窓会大会を開くとともに、母校の水泳プール建設に協力して資金を募り、三五〇〇円を寄付した。日中戦争が始まるや富丘会の活動も戦時色を強め、応召会員に慰問袋、戦傷者に見舞状、遺族に香典や田尻会長直筆の掛軸を贈り、一九四〇年には「支那事变戦没者慰霊祭」を行った。翌年には母校の学生文庫創設に際し、三六〇〇円を寄付した。

同窓会の名称は一九三八年の総会で富丘会と決める。卒業生から出された案のなかから田尻校長が選んだのだが、母校のある南太田町富士見台（当時）を通称富士見ヶ丘と呼んでいたからと伝えられる。

戦前、戦中のあわただしい中でも卒業生の間での勉強会は盛んで、横浜の生糸商に勤務する会員の集まり「生糸貿易研究会」、あるいは、「横浜経済研究会」、「経理研究会」などができ、母校の先生を講師に実務と理論の研究が続けられた。

栗原氏が会長に

終戦の翌一九四六年一月、富丘会は再建声明を出し、糸魚川祐三郎・母校校長を会長に推し、母校の大学昇格に備えて図書館充実のための一〇〇万円募金活動を始めた。一九四九年には卒業生からの初めての会長として栗原義潤氏（2高）が選ばれた。田尻常雄・元校長は名誉会長に推された。栗原会長はそれから一六年間、リーダーシップを遺憾なく発揮して戦後の富丘会の基盤づくりに力をつくす。一九四九年当時の会員総数三五六三名、地方支部一八であった。その年、母校は横浜国立大学経済学部生まれ変わ

り、清水ヶ丘への学舎統合に動き出した。富丘会は「学園緑化運動」の募金を進め、一九六一年の総会で緑化事業の完成を祝った。

二 念願の富丘会館誕生

五〇年史の発刊

一九六五年、二代会長に長尾貫一氏（7高）が選ばれた。その頃、横浜国大は程ヶ谷カンントリー・クラブのゴルフ場跡地に全学部を統合しようと、大学、神奈川県、横浜市、各同窓会代表で「横浜国立大学統合委員会」を結成した。富丘会から長尾会長、栗原名誉顧問が理事として参加し、ゴルフ場跡地の立替購入など全学統合に大きく寄与した。

長尾会長は会員同士の懇親を深めるために富丘ゴルフ会をつくり、第一回を霞ヶ関カンツリー倶楽部で開いたが、これは今も続いている。

三代会長大類武雄氏（6高）、四代会会長長野村長氏（16高）と続くが、野村会長の時代に実現したのが、横浜国立大学経済学部・経営学部五〇年史「輝く白亜」と、富丘会館である。五〇年史は野村会長が発行責任者となり、両学部、富丘会代表者で編集委員会を設け、ジャーナリスト松島精氏（16高）が二年をかけて取材・執筆したもので六九八ページと大部にわたる。内容も時代、時代の学生の生き様と学園の雰囲気を中心に綴られ、斬新かつユニークな学園史になっている。

会館に二億円募金

同窓生が気軽に集まれる同窓会館が欲しい、というのはみんなの願望で栗原会長の頃から懸案であった。一九七三年秋に「富丘会館プロジェクトチーム」をつくり、翌一九七四

年暮れに開館した。同窓の清水啓治氏（16高）が青山に新築したマンション「メゾン南青山」の二階全フロア約四〇〇平方メートルを借りる形で実現した。大広間はパーティ、結婚披露宴、講演の会場となり、食堂も入り、談話室にはバー、和室には碁、将棋もある。富丘会事務局もここに移り、同窓生の溜り場ができた。

当初の一年三カ月で三八組が結婚披露パーティを行い、各年次のクラス会、ゼミ会もしきりに開かれ、月平均利用者一七三〇人と上々の滑り出しとなった。

当初の保証金、什器、内装費のほか、賃借料を積立基金の利息でまかなう方針で、総額二億円の会館基金を募った。開館時には目標の半額に留まっていたが、卒年ごとに目標額を設けるなどきめ細かい活動が功を奏し、個人、法人の協力によって数年後には満額達成となった。

富丘経済研が発足

富丘経済研究会が誕生したのは一九七五年である。長尾貫一氏（富丘会相談役・当時）が講演会を通じて会員の交流を深めようと、自ら初代会長に就き、情熱を注いだ。第一回の講師は宮崎義一京大教授（16高）で、「当面する不況の性格について」と格調の高いものである。長尾氏の志は、続く歴代会長の野村長、本行基資（24高）、会長代行永井隆（30済）、鈴木隆（30済）、浅野純次（37済）の各氏に引き継がれ、二〇〇八年三月の例会で三七三回を数えている。

野村富丘研会長の時には、米シャウプ博士（戦後の日本の財政の基礎となったシャウプ勧告で知られる）の蔵書二千数百冊を購入して母校に寄贈した。資金一三〇〇万円は富丘研の会費の資金運用から生じた剰余金を充てたもので、今も大学中央図書館に「富丘経済研究会シャウプ文庫」として活用されている。

富丘研は卒業生以外にも門戸を開放し、二〇〇八年三月末現在で個人会員八二人、法人会員二一社、会員総数一一七人。毎月、各界から時の人を講師に招き、日比谷のプレスセンターで講演会を開いている。

総会へのアイデア

同窓会の中心行事は年次総会である。新旧の同窓生が大勢集まって肩をたたき合うところに、同窓会の楽しさがある。毎年五月に開かれる富丘会総会によりやく三〇〇人台の人が

集まっていた頃、目標一〇〇人と掲げたのが、一九七九年に五代会長に就いた本行基資氏（24高）である。

ゼミ別、職域別に総会への参加を呼びかけたり、富丘会報の充実を通じて卒業生の関心を高めるなど地道な努力が実って徐々に参加者がふえてきた。一九八一年総会は久し振りに横浜（ホテルリッチ横浜）で開いたことや、市内バスツアーを組んだこともあって一挙に五三〇人に達した。

同窓会も年月が経つと老若の差も大きくなり、価値観の違いも出てくる。そこで登場したのが「出逢いのテーブル」（一九八四年）。たとえば石油、証券と業種別にテーブルを囲んだり、住んでいる沿線別に集まるようにもした。沿線別は隣組の発想であり、これをきっかけに東横線沿線、大井町線沿線などは今も会員の交流が続いている。総会の運営は工夫の歴史でもあり、その結果として、一部の大学を除けば、例のない大規模な総会が毎年開かれている。

一九八三年から総会委員長を年次別に順送りにするようにしたが、これは名アイデアだった。大変な仕事になる総会委員長の選定はいつも頭の痛いことであったが、順送りすることによって該当年次の人たちが鳩首協議して委員長を決める。委員長を決めればその年次の会員は結束して総会の準備にあたり、総会への関心も高まる。一九九一年の総会（横浜プリンス）は七五九人が集う賑わいとなった。

富丘会館閉鎖へ

一九八三年の総会で川島喜八郎氏（16高）が会長に就任したが、この当時の難題は富丘会館の赤字続きだった。一九七四年の開館当初こそ結婚披露宴も多く順調に滑り出したが、世の風潮として結婚披露宴もだんだん豪華に、規模も大きくなり、同窓生も富丘会館では満足せず、都心のホテルを利用する人たちがふえてきた。

もともと昼間の利用客は少なく、夜の会合や打ち合わせに頼るのだが、場所が青山とはいえ都心からは少々離れているので、足も遠のく。会館の赤字がかさむので大家さんには家賃の引き下げを、レストラン会社には食事の単価引き下げを再三にわたって交渉し、レストランは三度も変わった。

オーナーの好意にすぎるのも限界があり、毎年の赤字は運用基本金に食い込んでいく実情なので、止むなく閉鎖も検討されるようになった。結局、一九八九年四月に富丘会館は閉鎖された。閉鎖して一三年五カ月を経ていた。閉鎖にあたっては会員から基金を募っていたので、あらかじめ閉鎖の方針を会員に知らせ、残った会館基金九九二〇万円は富丘会の別会計として管理されることになった。

富丘会館は一九八五年に結婚相談コーナー「富丘会ファミリークラブ」を設け、会員の縁組みに一役買っていたが、これも会館閉鎖とともに廃止された。

三 同窓会連合の結成へ

電算化名簿できる

一九八〇年代になると卒業生の累計も一万人を超すようになり、会費集めや会員名簿作成に合理化が求められてきた。終身会費制は一九六一年から始められていたが、個人口座からの自動振替（一九八四年）もできるようにした。会員名簿も手書きの原稿を外部に発注して作成していたが、一人ひとりに個人番号をつけ、電算化による名簿ができたのが一九八五年である。準備に一年半かけての成果である。

一九八七年の総会で鈴木勲氏（13高）が七代会長に選ばれた。鈴木氏は総会のすぐ後に病で急逝したため、副会長のなかで最年長の内山潤一郎氏（24高）が会長代行を一年つとめ、一九八八年の総会で田村辰雄氏（23高）が会長に選ばれた。

田村会長の時、富丘会館の閉鎖（一九八九年）に伴って富丘会事務局を「港区芝公園一―二―四、大西ビル」

に移すが、一九九三年にはより賃料の安い「港区三田二―一四―四、三田慶応ビジデンス」と二度の引越しになる。

財団法人認可へ

富丘会は創立以来、任意団体の同窓会組織として活動してきたが、やはり公益法人にした方が社会的信用も高まるし、税法上も優遇されるとあって法人化を準備してきた。一九九〇年一月一日、神奈川県知事から商工労働部管轄の財団法人として認可された。もろもろの事業を通じて「神奈川の経済の発展に寄与することを目的とする」（財団法人富丘会寄附行為第一章第三条）と定められている。この時から会長は理事長となる。公益法人制度についてはすでに国も行政改革の一環として抜本的改革に乗り出しており、大学同窓会としての財団法人富丘会も将来、新制度のもとで公益財団法人になるのか、一般財団法人になるのか、今後の検討課題である。

富丘会報の充実

一九九六年の富丘会報は一〇〇号を記念して「富丘会報一〇〇号の歩み」を特集した。富丘会報は会員相互をつなぐ唯一の媒体であり、会の活性化に欠かせないものである。会報の歴史は「一〇〇号の歩み」に寄せられた天野八郎氏（18高）の文に詳しいが、横浜高商同窓会の発足直後に発刊され、これも八〇年の歴史を刻んでいるのは間違いない。

年次総会の模様は写真入りで詳しく報じられ、グループ便りとしての地方支部、職域分会、年次・ゼミ・サークルごとの消息から、先輩、後輩の動静を知る。会員からの報告に加え、昨今は大学法人となった横浜国立大学の近況報告もふえた。取材・編集は広報委員会があたっているが、会報のサイズ、表紙、写真の点数なども充実し、すでに一三三号（二〇〇八年三月号）を数えている。

同窓会連合生まれる

二〇〇〇年一〇月二日、横浜国立大学同窓会連合が結成された。大学は各学部とも保土ヶ谷区常盤台キャンパスに統合されているし、旧師範、旧高専の卒業生より大学卒業生の方が多くなっているのに、同窓会は各学部の出身母体別に活動している。これを何とかできないかと思う人は多

かった。富丘会報は六〇号（一九八四年）では「高商・高工対談」を、一〇四号（一九九八年）では各学部の「OB合同座談会」を開いている。富丘会の地方支部には工学部、教育人間科学部の出身者が参加しているところもあるし、職域支部は出身学部を問うていない。高工と高商の有志でつくる三水会は今も健在である。

ただ、同窓会はそれぞれ固有の歴史を持ち、事情も異なる。教育人間科学部の始まりは遠く一八七六年創立の横浜師範学校であり、同窓会友松会は一二〇余年の歴史を誇る。工学部の同窓会は各学科ごとに独立している。一九九八年に富丘会理事長に就任した齋藤興二氏（32歳）は「お互いの歴史と伝統を尊重しながら大学全体の存在感を高めることに役立ちたい」と、工学部同窓会連合、友松会有志と語らって同窓会連合の結成に動いた。大先輩も協力も惜しまなかった。

同窓会連合は初代会長に工学部同窓会連合代表で、財団法人横浜工業会理事長の佐藤菊正氏（元工学部長）を選んだ。会長・事務局とも二年ごとに持ち回りと決めた。大学も法人化に伴って、横浜の地の利も活かした新しい大学像を追求しているが、それは過ぐる八〇年の歴史と伝統を活かしてこそ実現する。各同窓会はそれぞれの学部教職員、学生と新しい連携を構築しながら、母校の発展に寄与することを求められている。同窓会連合という結合はさらに様々な効果を生み出すだろう。

なお、この年六月、四代会長故野村長氏のご令室野村ときさんから、富丘会、富丘経済研究会に二九万米ドル（換算三一五〇万円）の寄付があり、のちに野村長基金が設けられた。

二〇〇五年には元理事長故田村辰雄氏のご子息田村彰浩氏から、一〇〇万円の寄付があった。

若杉明氏（28歳）が理事長に就任したのは二〇〇二年で、この頃から富丘会の事業の一つと

して在学生への支援活動が目立ってきた。

個別の就職相談には以前から協力していたが、二〇〇三年から富丘会の会員がボランティアで大学へ出向き、学生からの相談に乗るようにし、二〇〇七年度には相談は三四八件に達している。卒業生による連携講義も二〇

○五年から始まった。各分野で働く先輩たちがそれぞれ業界の実情を説明し、経験をもとにした人生観、職業観などを話す。学生にとつては単位にもなるが、専任のコーディネーターの働きと、先輩たちの「学生の心に灯をつける」熱情が伝わって評判よく、受講者は年間四〇〇名近い。学生からのアンケートによると、「教員の意欲」は最高の評価を受けている。

二〇〇六年一二月に中央図書館ホールで開かれた「第一回横浜国大ゼミ対抗プレゼン大会（ビジネスプランコンテスト）」は、経営学部学生たちの発案を大学と富丘会が応援して実現した。テーマは起業プランで、優勝したのは「お洒落さんのためのカスタムビジネス」。国大生をより能動的なタイプにするのに役立てばというねらいがある。

このような学生支援活動は、すぐれた後輩を世に出すお手伝いとともに、在学生との交流を通じて富丘会を理解してもらうためである。二〇〇六年四月の入学生から学生会員制を設け、入学手続きに「富丘会学生会員案内」を同封してもらったところ、入学生四八〇人のうち一九四人が入会（会費は四年間で四〇〇〇円）した。在学中は富丘会報を送る。

永井隆氏（30歳）が理事長に選ばれたのは二〇〇六年。この年の一月一日、第一回横浜国大ホームカミングデーが実現した。大学と三同窓会の共催によるもので、生憎の雨にもかかわらず九〇〇人近い人たちが常盤台キャンパスを訪れた。大学会館ホールでは各同窓会を代表する三氏が「横浜国大に期待する」をテーマに意見を交換し、早くも同窓会連合の成果をみせた。

健全財政めざして

同窓会といえども健全財政は運営の基本である。富丘会の収支はここ数年赤字を続けていたが、二〇〇五年からわずかながら黒字に転じている。野村長基金利息など受取利息がふえたこともあるが、会報発行費用を大幅に削減したことが大きい。収入の大半を占める会費収入は漸減傾向をたどっている。富丘会員の総数は二〇〇八年二月末で二万三四一四人だが、うち会費納入者は三六一八人と、全会

員の約一六％に留まる。若い層ほど同窓会意識が低いと言われるが、新設の学生会員の中には終身会費を払っている人も数人おり、大学の教職員、学生と卒業生が新たな連携を深めていく中にこそ、富丘会の未来がある。

(注) 人名の下の()は昭和の卒年。高Ⅱ高商、済Ⅱ経済学部、経Ⅱ経営学部

二 富丘会の八〇年

〈富丘会の歩み〉

1927(昭和2)年3月	高商第1回生卒業、横浜高等商業学校同窓会設立
10月	第1回総会。神奈川、東京、支部発足
1928(昭和3)年5月	同窓会報発刊。大阪支部発足
1937(昭和12)年	富丘会と命名
1949(昭和24)年5月	横浜国立大学発足
12月	栗原義潤氏(2高)卒業生として初代会長に 「富丘会報」復刊、会員3,563人、18地方支部
1953(昭和28)年4月	母校30周年記念総会
1956(昭和31)年5月	総会を初めて東京(八芳園)で
1961(昭和36)年6月	緑化事業完成贈呈式
1964(昭和39)年5月	規約改正して役員任期二選まで
1965(昭和40)年5月	長尾貫一氏(7高)会長に
1966(昭和41)年5月	「横浜国立大学統合委員会」に参加
1969(昭和44)年5月	大類武雄氏(6高)会長に
1971(昭和46)年11月	学生懸賞論文を募集
1973(昭和48)年5月	野村長氏(16高)会長に
1974(昭和49)年12月	青山に「富丘会館」開設
1975(昭和50)年6月	「富丘経済研究会」発足
12月	「横浜国立大学経済・経営両学部五〇年史」発刊
1977(昭和52)年5月	第50回総会(帝国ホテル)、241人参加
1979(昭和54)年5月	本行基資氏(24高)会長に 「富丘会館」募金2億円達成
1982(昭和57)年12月	田尻常雄・初代横浜高商校長胸像除幕

第三部 教育研究・学生生活の回想と同窓会

- 1983(昭和58)年4月 川島喜八郎氏(16高)会長に
総会委員長を年次順送りに
- 1985(昭和60)年3月 電算化名簿完成
- 1987(昭和62)年6月 鈴木勲氏(13高)会長に就任するも急逝、内山潤一郎氏(24
高)会長代行に
- 1988(昭和63)年4月 田村辰雄氏(23高)会長に
- 1989(平成元)年4月 「富丘会館」閉鎖。事務局は浜松町に
- 1990(平成2)年11月 財団法人富丘会認可
- 1991(平成3)年5月 64回総会に759人参加
- 1993(平成5)年9月 事務局を三田に
- 1996(平成8)年11月 「富丘会報」100号発刊、会員15,300人に
- 1998(平成10)年4月 斎藤興二氏(32済)理事長に
- 1999(平成11)年11月 新制大学50周年祝賀式に三同窓会連携して参加
- 2000(平成12)年10月 「三同窓会連合」発足
- 2001(平成13)年12月 ホームページ開設
- 2002(平成14)年4月 若杉明氏(28済)理事長に
- 2003(平成15)年10月 個別就職相談始める
- 2004(平成16)年6月 大学ビジネススクールに200万円寄付
- 2004(平成16)年12月 社会科学系創立80周年記念式典、記念募金始まる
- 2005(平成17)年4月 連携講義始める
- 2006(平成18)年4月 永井隆氏(30済)理事長に
- 11月 第1回ホームカミングデー
- 12月 ゼミ・プレゼン大会を支援
- 2007(平成19)年3月 大学教員を特別賛助会員に
- 11月 第2回ホームカミングデー
- 2008(平成20)年4月 入江昭夫氏(37済)理事長に